

臨海実験所に新しい採集調査船“臨海丸”進水

森 澤 正 昭 (臨海実験所)

神奈川県三浦半島先端油壺湾に気鋭の採集調査船臨海丸が姿を現したのは今年3月18日未明である。本船は、愛知県蒲郷のヤマハ発動機蒲郷工場で、昨年(平成7年)12月1日に起工式が行われ、今年(平成8年)3月12日に進水式が行われた後、艀装を完成させ、当日臨海実験所記念館前の海上にその勇姿を見せたのである。又、6月7日には、大学、理学部、建造関係者、地元関係者の参列のもと、竣工披露式及び懇親会が臨海実験所内で開かれた。

これまで臨海実験所には1973年(昭和48年)に進水した3.2トンの木造船臨海丸が研究や学生実習に用いる海産生物を採集するために長年使われてきた。しかし、昨年その老朽化が激しく、又最近の生物学の飛躍的発展に対応するために、研究者、学生を数多く収容でき、広い海域を航行することができ、又新しい設備を備えることで、通常海産生物に加え、底棲生物、深海性生物が採集ができ、その結果、発生学、生理学、生態学、系統分類学等の分野における高いレベルの研究及び臨海実習等の教育を行うための新鋭船が不可欠となり、そのために10数年来つづけてきた要求が実ったのである。

本船は全長18.00m、幅4.80m、深さ1.29m、総トン数17tの強化プラスチック(FRP)製で380馬力のディーゼル機関1基を備え、最大速度は20.4ノットである。定員は乗組員2名、その他23名の合計25名である。航海計器としては、磁気コンパス、GPS航法装置、音響測深機を備えている。

本船は生意気にも線長2000mの直径60mmのワイヤーを巻き付けた油圧ウインチを備え、船尾には起倒式のAフレームがついており、ワイヤーの先につけた大型のプランクトンネットやドレッジで数百メートルの海底や1000m近くの海中の深海性生物が採集できる可能性を秘めて

いる。また、贅沢なサイドスラスターを装着しており、操船が容易で小回りが利く。実験段階ではあるが、日本では珍しい頭索類ナメクジウオの採集、未だ生殖の時期や場所がわからない最も原始的な脊椎動物である円口類ヌタウンギの生殖場所の探索、深海性のトリノアシ、ガラス海綿の採集、腕足類等の採集、深海底の生物の探索などの試みが、臨海実験所の3名の技官、鈴木英雄、関本実、関藤守の着実な技術の元で臨海実験所、進化多様性、地質学教室、さらには海洋研の教官学生らによって始められている。

そもそも臨海実験所が開設された4年後の1890年(明治23年)には、工部大学校機械工学教授として来日していたイギリス人のウエスト氏が臨海実験所を基地として、自身で設計した“大名丸”で珊瑚、海栗、ぜん虫、貝殻等を採集したという記録がある。その後、アラン・オーストン氏のゴールデンハイドン号(明治29年)、デーデン氏の荒井丸(明治33年、後に実験所に寄贈)が活躍したという。臨海実験所に最初の採集実習船がお目見えしたのは1915年(大正4)年で、船名を、三浦一族の領袖であった三浦道寸からとった、15m、17t、20馬力の発動機船道寸丸で三浦家の家紋を付けて伊豆大島まで行ったという。その後ISAOあらい丸(1927年、昭和2年)、臨要丸(1957年、昭和32年)、オベリア(1959年、昭和34年)、先代臨海丸と続くのである。

これらの名採集船の血筋を引く“新”臨海丸は近代化された装備を持つ新鋭船である。おそらくこれからの海洋生物学の発展に大きな力となることが期待されている。本船の竣工には理学部、大学の多数の方々のご支援をいただいた。臨海丸はその期待とご厚情に応えられるような未来の名採集調査船として大きな成果を上げようとしているのである。



採集調査船「臨海丸」と記念館

地理学教室の2号館から5号館への移転の挨拶

大森博雄(地理学専攻)

地理学教室の理学部2号館から5号館への移転に関しては、一方ならぬご尽力を賜り厚くお礼申し上げます。おかげさまで、7月8日から1週間程度の引っ越作業の後、7月15日より授業および事務等の業務を5号館の6、7階で開始いたしました。ペンキのにおいも爽やかな新しい環境のもと、職員・学生一同、心新たにして、地理学の発展のために努力する所存でございます。

ご承知のこととは存じますが、5号館は1976年に竣工し、数学、地質学、鉱物学の3教室が入居しておりました。大学院重点化の一環として大学院数理科学研究科が新設され、数学専攻が理学系研究科から分離・独立するとともに、駒場に研究・教育棟が竣工し、昨年9月末をもちまして5号館から駒場の方に移転いたしました。数学教室が5号館で専有しておりました跡地利用に関しまして、地学科が一か所に集まることが好ましい、またそうすることによって拡充・改組されました生物科学専攻が2号館に集中できるという趣旨から、地理学教室は5号館に移転することになりました。地学科の一員として、地質学・鉱物学教室と隣付き合いができることになり、心強く思っております。

地理学教室は1911年理科大学地質学科に地理学講座が開設され、同時に地質学教室から独立して創設されました。当時は動物学、地質学、鉱物学教室とともに現在の弥生門近くの建物に入っていたとかがっております。その後1923年9月の関東大震災時には、多くの施設・設備が破壊等の被害を受け、その年の暮に完成した応急施設に10年ほど仮住まい同様の生活をしていたとのことでした。1934年に理学部2号館が完成しますと、動物学、植物学、人類学、地質学、鉱物学の教室とともに2号館に移転し、以来62年間、地理学教室の歴史の大半を2号館で過ごしてまいりました。小教室でありました地理学教室は、他教室のご理解・ご支援のもと、1919年には地理学科が開設(1951年に地質学科、鉱物学科とともに地学科に改編)され、1960年には自然地域学講座が増設される等、施設・設備も拡充し、日本の地理学教育・研究の中核として、多くの業績と人材を輩出してまいりました。特に、1977年に地質学、鉱物学の2教室が2号館から5号館に移転し、それにとまう2号館の改修時には、地

理学教室の2号館での占有面積は、従前の1.8倍に増加いたしました。教官でさえ相部屋であった事態は解消され、教育・研究環境は大幅に改善されました。この間の教育・研究環境の拡充・充実のために苦勞されました地理学教室の先輩に感謝いたしますとともに、ご理解を示されました他教室の方々にお礼申し上げます。

数学教室の移転実施時期のめどがつきました昨年の春以来、理学系研究科長、会計委員会、建物委員会、事務長、事務長補佐(経理)、司計掛、施設掛、用度掛、また、東大本部の施設部を始めといたします多くの関係各位にお世話いただき、地理学教室では漸次移転の準備を進めてまいりました。本来本年3月末までに移転を完了する予定でありましたが、改修工事の遅れ等から7月の移転実施ということになりました。移転遅延のためにご迷惑をおかけいたしました2号館の生物科学専攻、会計委員会や事務方の方々にはお詫び申し上げますとともに、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

1993年には大学院重点化により、地理学教室は地理学講座・自然地域学講座が改編され、地理学大講座・広域理学講座が開設され、教授3、助教授3、助手1の新体制になりました。設備・備品も充実し、この間、教育・研究環境は拡充したものと自負しております。その矢先の移転問題でしたので、些かためらいもございましたが、前記の趣旨に賛同し、また、移転に関しましては十分面倒をみてもらえるとのことから、移転を決意いたしました。そうした理由から、地理学教室では最低限の条件として、「2号館に現有している教育・研究施設を5号館でも実現する」ことを考えておりました。5号館での占有面積は1147㎡で2号館での767㎡に比べ1.5倍に拡大し、分散していた図書室も一か所に集中するなど設備の充実が図られました。しかし、2号館では設置されておりましたストーンテーブルや暗室の諸設備等の実験設備の一部は5号館では設置ができず、また、6階では雨漏りがするなど、不都合な点も多く存在いたします。今後これらの諸設備の補完を始めとして教育・研究環境の充実に努めるつもりではありますが、皆様には倍旧のご理解とご高配をお願い申し上げる次第です。

理学系研究科長と理学部職員組合との交渉

1996年7月29日(月)12時15分より益田研究科長、柚原事務長と理職との定例研究科長交渉が行われた。主な内容は以下の通りである。

1. 職員の昇級・昇格等の待遇改善に関わる問題について

1) 技術職員

理職は、技術部新組織図の空席を埋めるよう、4月の交渉以来毎回要望して来ているがこの内主任の席は埋めると回答をしているにも関わらず、未だに放置されているので、再度埋めることを要求した。これに対し事務長は、技術委員会の近藤教授や他の委員達の都合が合わないで未だ進んでいないと回答した。又理職は、この組織図は空席の有るまま教授会に承認されているのかと質したことに対して、組織規定に関した事は教授会にかけることになるが、人事については技術委員会の諮問を得て技術部長が決定することになっているので、教授会には出していないと、事務長は答えた。組織図が昇級、昇格に関わるようになりつつあるので、組織図を空席のままにしておくことは、技術官の処遇の不利益につながる恐れがある、又国大協の基準といわれる1系15人はあくまでもモデルを示したものであり、理学部がどのような態度をとるかが問題であり、4系維持するなら、技術長も4名置くことがよりよい処遇につながるのではないかと質したことに、事務長は、東大は国大協の基準に準拠するとしている。4系は理学部での職務に必要であるが、人数が少ないので、技術長は4名置くことは出来ない。4月に本部事務局との事前協議で技術長4名は発令できないと言われている。と回答した。

2) 事務職員

理職は、今年度の事務職員の6級昇格はいるかどうか質問した。中央事務で1名6級昇格が確定した。退職前昇格は該当者なしであると、事務長は回答した。理職は、係長、事務主任の定年前6級昇格の年数を出来るだけ早める努力を引き続きしてもらいたいと要望した。

3) 図書職員

理職は、職員側から提出した事務当局の組織化案に対する質問メモの回答は7月初旬とのことであったが、まだ回答がないのは何故かと質した。事務長は、最終稿が未

だ出来ていない、詰めの段階なので、9月には回答すると答えた。又、組織化については、教室事務についてのものを含めてどこで検討するのが妥当かを、人事委員会とも相談していると答えた。

4) 行(二)職員

理職は、行(二)職員の処遇改善で、人事院が、国公労連との交渉で昇格基準等の緩和を表明しているので、理学部の該当者について、引き続き昇格実現への努力を続けてもらいたいと要望した。

2. 中途採用者不利益解消問題について

理職は、年齢・号棒が基準に達しながら在級年数不足で5級昇格が出来なかった生研の例を挙げて、理学部の中途採用者も5級昇格の時再度不利益を被る恐れがあるので、現在出来る可能な限りの不利益解消の努力をしてもらいたいと要望した。

3. 専行職移行問題について

理職は、専行職移行問題に関して新たな動きはあるか又科学技術基本計画には、支援職員についても書かれているがこれとの関連はどうかと質した。研究科長は新しいことは聞いていない、基本計画については、資料は配られたが、学部内では検討していない。と答え、事務長は、専行職とのからみで進められることはないだろうと回答した。

4. 施設営繕について

理職は、前回の交渉で、営繕業務の担当者を、施設係に置くことを検討中であるとの回答を得ていたが、どのような結論がでたのかを質した。正式な発足は来年4月以降になる予定であるが、何か問題があれば、現在でも施設掛が対応するようになっていると事務長は回答した。

5. 中間子、核研の高エネ研との合併について

核研では、筑波に行けない技官が十数名いて、配転先を探しているとのことであるが、このような移転困難者を理学部で受け入れる考えは有るかを理職は質した。事務長は、そのような話は聞いていない、問い合わせもない、定数の空きがない状態では受け入れることもできないと答えた。

人事異動報告

(助手)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
植 物 園	助 手	村 上 哲 明	8.7.16	昇 任	京都大助教授へ
化 学	助 手	市 田 光	〃	休職更新	8.7.16~9.1.15

博士（理学）学位授与者

平成8年6月24日付学位授与者（4名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	物理学	森 孝 雄	ドーピングされたペンタセンの磁氣的及び電氣的性質についての研究
論文博士	物理学	大 濱 哲 夫	Ce および Yb 金属間化合物における温度に依存した超微細結合
〃	物理学	溝 川 貴 司	強い d 電子間クーロン相互作用と軌道混成の競合する 3d 遷移金属化合物の電子状態
〃	地球惑星物理学	吉 田 満	モホ不連続面不規則構造を横断するラブ波の研究

平成8年6月28日付学位授与者（1名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	物理学	三 井 唯 夫	宇宙線反陽子および陽電子流束の新しい計算

平成8年7月15日付学位授与者（4名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	天文学	土 井 靖 生	白鳥座X領域中の拡散星間ガスからの〔C II〕輝線輻射
論文博士	情報科学	須 田 礼 仁	並列回路シミュレーションのための新しい反復線形解法の研究
〃	生物科学	米 賢 二	腫瘍壊死因子 (TNF- α) の構造と機能に関する研究-抗体を用いたアプローチ
〃	生物科学	矢 部 尚 登	シロイヌナズナ SP90 ファミリー-遺伝子 HSP81 の転写制御機構の分子遺伝学的解析

平成8年7月31日付学位授与者（2名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
課程博士	鉱物学	山 片 正 明	高压下の結晶格子に与える静水圧性の影響
〃	物理学	石 田 卓	シグマ粒子 ($m = 595\text{MeV}$) の存在について pp 中心衝突過程の研究並びに $\pi\pi$ 散乱位相差の再解析